

先週への回答



わたしは「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ、人ノ下ニ人ヲ造ラズ」なんて言葉を残し、慶応義塾を創設して、死んでから一万円札になったが、死んでからのほうが世間知を身につけたように思う。

わたしが一万円札になってこの世に復帰したのは一九八四年。わたしはテデオコにずっと並んで生まれ、一人一人に断裁されて帯封で束ねられて日銀（日本中央銀行）の金庫に収められて、しばらく寝かされていたが、やがて現金輸送車に乗せられて、或る市中銀行の金庫に引越させられたが、仲間は次々と運び出されて、わたしの束だけ残った（後でわかったのだが、その頃、バブル景気だった）。

さらに十年近く寝かされて、ある日パ

ラパラと機械で枚数を数えられてATMというものから首を出して、初めて外界を覗いたと思ったら、シワシワのおばあさんの手でつまみ上げられた。同胞十二人と。

十三人ということは、おばあさんの年金は二ヶ月で十三万円。月にして六万五千円のように。おばあちゃんは駅前のスーパーに立ち寄って、大根を上げしげと何本も品定めして、大根一本とサンマ一匹を買って古びた公営住宅に帰ると、小さな台所で大根をおろし始めた。焼きサンマに大根おろし添えが昼食のようだった。

そこに電話があった。

「もしもし、遠山ですが・・・」のおばあちゃんが、「ええー、お金を落としましたあー」と受話器にしがみついて、「どーさんの春彦ちゃん。えつ、会社クビになる

一、五百万円すぐに持つてけばいいんだね。うん、わかった」

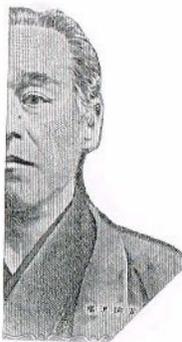
あたふたとおばあちゃんは、わたしたちが入っている巾着袋をかかえて、銀行へ駆け出して、窓口から同胞五百人（五百万円）を下ろして、駅前に待つ真面目そうなサラリーマンふうにおばあちゃんの全財産を渡したのである。

わたしはおばあちゃんの息子だか孫だか想いに感激した。たとえ自分は粗食に甘んじて、身内の難儀に手を差し伸べるやさしさに。

後でわかったのだが、これがオレオレ詐欺という、年寄りが貯めたなけなしのおカネを息子だか孫だかになりすまして騙し取る手口だと知って悲憤慷慨にかられた。

が、銀行窓口のかわいい女子行員が、おばあちゃんに不審を抱いて機械をきかせて警察に通報し、男が札束を受け取ると同時に刑事に手錠をかけられたのに、わたしは安堵した。

これからもこの世に生々流転を見ながら、人の手から手に流れていくのだから、わたしはおばあちゃんの中着袋の中で一先ず一息ついたのである。



今週の問題



□の中に漢字を埋めて
四字熟語を完成させてください。